

禅林寺静遍の草木非情成仏説について

中村 本 然

(高野山大学)

一 はじめに(要旨)

曇無讖(三八五―四三三)訳の『大般涅槃経』の「一切衆生悉有仏性」をめぐる議論として中国仏教界においては無(非)情仏性説が提唱されることになる。その中でも天台教学においては、湛然(七一―七八二)の著した『金剛鐺論』を起因として非情の成仏が論議されることになる。

『金剛鐺論』の思想は日本天台にも影響を与えることになり、安然(八四―九一五?)の『胎藏金剛菩提心義略問答抄』(菩提心義抄)では草木自発心成仏が論じられた。草木の発心成仏を宣揚するとして『草木発心修行成仏記』も撰述されることになる。草木の発心成仏を認めるか否かは天台教学史の中で常に問題とされてきている。

真言宗においても空海(七七―八三五)以来草木の成仏について論じられてきている。草木成仏を言及する著書として『秘蔵記』がある。『秘蔵記』の注釈書は数多くみられるが、最古のものとして並び称せられるものに『蔵中治金抄』(成賢(一一六―一二三))、口深賢(?―一二六一)記・一二二二年撰述と『秘蔵記鈔(非相伝抄)』(静遍(一一六―一二二四))、口道範(一一七八―一二五二)記がある。

成賢と静遍はともに醍醐寺勝賢（一一三八—一九六）を師とし、両者の晩年（一二二二年）には互いに師資となり秘法を伝授しあう関係にあった。ところが『藏中冶金抄』と『秘蔵記鈔』の草木成仏に関する扱いは著しい相異がみられる。成賢は『秘蔵記』所説の草木成仏の語義解釈にとどまるのに対して、静遍は円珍（八一四—八九一）の『円多羅義集』や安然の『菩提心義抄』所説の草木成仏を視野に入れた理解を示している。安然によって提起された草木自発心成仏についても真言教学からの解釈が試みられている。

従来、空海は六大縁起思想の立場から草木成仏は説いたが、草木の発心修行成仏まで言及していないといわれ、草木発心成仏を唱え出すのは、頼宝（一二七九—一三三〇）の『真言本母集』以降であるとされてきている。頼宝から遡ること約一世紀、静遍の『秘蔵記鈔』には、草木の発心成仏が真言教学の問題として扱われていたのである。

二 問題の所在

真言密教における草木成仏について、宮本正尊博士は「草木国土悉皆成仏の佛性論的意義とその作者」において、那須政隆博士の「真言密教における草木成仏論」をとりあげている。

真言密教において草木等の非情成仏を特に論議の課題に取りあげるようになったのは比較的後世に属するが、しかしその思想の淵源を尋ねれば大日経にこれを求め、また弘法大師にそれを発見し得る。

『大日経』卷五阿闍梨真実智品第十六（大正一八、三八中）に云く、我即同心位 一切処自在 普遍於種種 有情及非情、

『秘蔵記』第六十三章（大師全集Ⅱ三七）に云く、草木非情成仏義。法身微細身五大所成。虚空亦五大所成。草

木亦五大所成。法身微細身。虚空乃至草木。一切処無不遍。是虚空是草木即法身。於肉眼雖見麁色草木。於佛眼微細之色。是故不動本体稱佛無妨碍

また古來弘法大師の文から草木成仏の文証として挙げられているものは左の如くである。…(中略)…(この後に『付法伝』『卍字義』『四種曼荼羅義』『即身成仏義』からの例証がみられる。筆者)

以上は文証の主なものであるが、真言教学では右の如き文証によって草木等の非情成仏を成立の正義としている。立論の大綱は次の如くである。…(中略)…縁起法界の当相は法界法身の三摩耶身(標幟・象徴)である。弘法大師は縁起法界の体性は六大であるとし、六大縁起説を唱えた。…(中略)…顕教の華天両一乗にも草木成仏を言うが、それらは何れも理性に帰しての他依身成仏の義であって、まだ草木国土等の非情自体の成仏を認むるまでに至っていない。然るに真言密教の所立は、草木国土等の非情がそれ自体において、有情と齊しく発心修行して成仏するという自依身成仏である。…(中略)…大師が十住心論卷十(全集I四〇〇)に「大日経に是の如くの無量の四種曼荼羅身の住処と及び説法利益と明す」と述べているのは、三摩耶曼荼羅身(象徴・標幟)なる草木国土等の非情にも説法利生の功能・発心修行の義相があることを示すものである。⁽¹⁾

那須博士の主張を整理するならば、次のようになる。

1、真言密教における草木成仏説の思想的根拠を『大毘盧遮那成仏神変加持経』(大日経と略す)とし、その提唱を空海に求めていること。

2、『大日経』の「阿闍梨真実智品」と『秘蔵記』の教説を草木成仏の典拠としていること。文脈から『秘蔵記』は空海の撰述として扱われているように受けとめられること。

3、空海は六大縁起説を唱え、縁起の当相を法身の三摩耶身とみなしていること。

4、華嚴宗・天台宗にいう草木成仏説は理性に帰しての他依身（心カ）成仏であるのに対して、真言密教にいう草木成仏は有情と齊しく発心成仏する自依身（心カ）成仏であること。

その一方で、坂本幸男博士は「草木成仏の日本的展開」の中で、空海の草木成仏に言及して

……六大縁起の色心平等の立場で説かれているのである。従って一塵一法に至るまで心識を具有しないものはないことになる。そして若しも一塵一法が心識を具するとすれば、発心修行するのは当然であり……⁽²⁾

しかしながら、空海は草木が自ら発心修行して成仏するとは明言していないとし、後世の頼宝等によって、この問題が議論されることになったとしている。

真言教学史の中で草木成仏説が論じられてきたことに関して、亀井宗忠氏は「真言宗における草木成仏論と即身成仏の人証とについて」で前述の宮本論文・那須論文を引用した上で

然るに中古以来、真言宗の学徒は……（中略）……非情の草木そのものにも、自ら発心修行があり、菩提涅槃の義があると説き、草木成仏をもって、真言宗独特の教義としているが、これは六大縁起論を誤解したところから起こった戯論であると称すべきであろう。⁽³⁾

といい、草木が発心し成仏するという理論は六大縁起論の誤解から生じたものであり、草木成仏論を真言宗特有の教義とみなすことに疑義を呈している。

このような先行研究の成果を踏まえた上で、この度の報告では『秘蔵記』及び『秘蔵記』の注釈書を中心に真言密教に展開した草木成仏説について検証することにした。

三 空海の著作に見る非情について

空海は『即身成仏義』において

諸の顕教の中には四大等を以って非情と為(す)、密教には則ち此を説いて如来の三摩耶身と為(す)、四大等心を離れず、心色異なりと雖も其の性即ち同なり、色即ち心、心即ち色、無障無碍なり⁽⁴⁾

と、顕教では地大・水大・火大・風大等の四大を非情とみなすが、密教においては如来の三摩耶身とする。四大等心(識)大を離れるものでない。心色はその性を同じくする。

『卍字義』には「草木也成ず 何に況んや有情をや」⁽⁵⁾と非情である草木ですら成仏するのであるから、有情が成仏しないわけがないといい、また別に箇所で

水外に波無し 心内即ち境なり 草木佛無くんば 波則ち湿無けん 彼れに有って此れに無くんば 権に非らずして誰ぞ⁽⁶⁾

と、水の外に波が存在しないように、(内)心を離れて(外)境はない。草木の非情に佛性がないというのは、波に湿性がないというに等しい。彼(有情)に佛性があり、此(非情)にないというのは権説であり実説ではない。しかも法身の三密は繊細な塵芥の中にも収まり、大虚空にも周遍しており、瓦石草木を扱ふこともなく、人天鬼畜を選別することもないと明す⁽⁷⁾。

『秘密曼荼羅教付法伝』には法身・智身に關する同様の主張がみられる。

是の如くの法身智身二種色相平等にして一切衆生界一切非情界に徧滿して、常恒に眞実語如義語曼荼羅法教

を演説したまう。⁽⁸⁾

（このように）自性理法身と受用智法身とは平等であり一切の衆生界・一切の非情界に普く遍じており、常に真実なる言葉によって曼荼羅の教えである密教を説き続けている。

『遍照發揮性靈集』の「式部笠の丞が為の願文」には「有情非情動物植物。同じく平等の佛性を鑑みて。忽ちに不二の大衍を証せん⁽⁹⁾」と、空海は有情・非情・動物・植物もともに平等なる佛性によって、速やかに不二摩訶衍（自性法身）の境界を証得するように祈念している。

ところで草木成仏説の思想的根拠と目された『大日経』についてであるが、空海はこの一文によって六大縁起思想を形成する。

大日経に云わく、我れは即ち心位に同なり、一切処に自在にして、普く種種の有情及び非情に遍ぜり、阿字は第一命なり、縛字を名づけて水と為（す）、羅字を名づけて火と為（す）、咩字を名づけて風と為（す）、佉は虚空⁽¹⁰⁾に同じ

つまり空海は「我即同心位」を識大とみなすことにより、この一文に六大の概念を見出そうとした。ここには大日如来の境界が有情・非情に遍満せることが説かれている。空海はその文の「一切処自在。普遍於種種。有情及非情」について、六大の自在用無碍の徳を表すとみなした。⁽¹¹⁾ 安然是『大日経』の教説とこの文を釈した『大毘盧遮那成仏経義釈』（義釈と略す）を典拠として草木発心成仏を唱えている。⁽¹²⁾ 安然の記述については、後にとりあげることとする。

四 『秘藏記』の作者や成立年代に関する先行研究

本報告で取り上げる『秘藏記』について触れておくことにする。『秘藏記』の作者や成立年代については数多くの研究報告がなされているが、いまだ定説をみるにいたってない。

まず作者についてはこれまでに四説がいわれている。即ち a 不空三藏説・惠果和尚記、b 惠果和尚説・空海記、c 唐僧文秘記・入唐僧円行請來說、d 略本は空海や杲隣口説・円行記、広本は文秘記・円行請來說である。

a・bの二説は早くからいわれており、『秘藏記』の最古の注釈書ともみなされる『藏中冶金抄』に

作者の事 二説有り。一に云わく。不空の口決惠果之れを記し給う。一に云わく。惠果の詞を大師御在唐の時、
記せしめ給う云云 後説を以て宜と為す。故に覚鑊等、此を御作録に入れるなり。云云 広略の中、略本を以
つて正と為す⁽¹³⁾

と論じられている。c 説は大村西崖博士の『密教発達志』にみる説であり、d 説は加藤精神博士が「秘藏記の著者に
ついて」の論考で唱えた説である。⁽¹⁵⁾近年の研究報告では、『秘藏記』の作者を選定する議論から離れて、『秘藏記』に
引用される文献等の考証による成立時期の問題へと移行している。

『秘藏記』の成立年代については、これまでに四説が唱えられている。

1 向井隆健説（九八七―一〇三六年）。向井氏は『秘藏記』成立考⁽¹⁴⁾で

『秘藏記』は一時に成立したのではなく、かつ漸次増広されたものが編集されて成立したものと考えられるので
ある。編集者については今の所不明である。編集推定年については、『撰無礙経』が一応尙然によって請来され

たとするならば、彼が帰朝した九八七年を上限とすることができる。また下限については、『秘蔵記』の名が最初にみられる長元年中（一〇二八—一〇三六）という記述によれば、一〇三六年ということがいえると思われる。：（中略）：それは決して弘法大師にまではさかのぼることはできないのである。：（中略）：従来の円行、文秘、或いは大師の弟子による印信口決類、またそれを継承する後世の関係者などによるもの等諸種の文が混交しているものと思われる。⁽¹⁶⁾

ここには①『秘蔵記』が漸次増広され編集された著書であること、②編集推定年は九八七年から一〇三六年とみること、③弘法大師による編集ではないこと、④『秘蔵記』は円行・文秘或いは空海の弟子の印信口決、その継承者（真言宗末徒）の文などによって構成されていること、が論じられている。

2 甲田宥咩説（大約九〇〇年頃）。甲田氏は『定本弘法大師全集』の『秘蔵記』の解説の中で

『秘蔵記』が『撰無礙經』を参照しているとすれば、その請来は尙然以前と思わざるを得ない。：（中略）：現存の『秘蔵記』は漸次増広されたとの意見もあるが、平安後期以降の写本からはその痕跡はうかがえない。：（中略）：『秘蔵記』を引く書物は賢宝が『秘蔵記愚草』の巻頭に指摘するように、済遅以前にも存在する。即ち益信（八二七—九〇六）撰『金剛界八巻次第』、玄静（一〇〇四—）撰と考えられる『無尽莊嚴藏次第』、天台の明達（八七三—九五一）撰『智界私記』、法三宮真寂（八八六—九二七）の『梵漢相对抄』、石山淳祐（八九〇—九五三）の『金剛界四巻次第』、『同六巻次第』等である。：（中略）：本書の名が見える最古の例は安然（八四一—九一五）の『大日経供養持誦不同』二である。：（中略）：前記諸師の年代を考えれば、『秘蔵記』は大約九百年頃には成立していたように思われる。然も、益信と玄静は元来天台より東密に転じた宗叡（八〇九—八八四）

の弟子であり、中でも玄静は宗叡やその資禪念に授法した後、安然やその資最円に台密を学んだ程であるから、現存の『秘藏記』が天台の大師の撰である可能性も強い。⁽¹⁷⁾

即ち①『撰無礙經』の『秘藏記』への影響を想定するならば、この經の請来は尙然以前と考えられること、②平安後期の写本には『秘藏記』の増広の跡が認められないことへつまり『秘藏記』はこれまでいわれてきたように漸次増広されてきたものではない、③本書を紹介する最古の文献は安然の『大日経供養持誦不同』であること、④『秘藏記』を引用する文献の年代から、本書の成立は約九〇〇年頃と推定されること、⑤『秘藏記』を依用する人々の周辺の状況から『秘藏記』は天台宗の人によって撰述された可能性も考えられること、が述べられている。

3 米田弘仁説（八三九〜九〇六年）。米田説は「『秘藏記』の成立年代」の報告にある。

『秘藏記』には増広がなかったということ为前提として、成立年代について考察してきた。∴（中略）∴『秘藏記』は『両部金剛名号』を請来した円行の帰朝年時である八三九年から、『円城寺八卷次第』の作者である益信の没年、すなわち九〇六年までに成立したものと考えられる。⁽¹⁸⁾

4 大沢聖寛説（八八五〜九一〇年頃）。大沢説は「秘藏記の年代再考」にみられる。

『秘藏記』と明示し、その文を引用している、安然撰の『大日経供養持誦不同』の推定撰述年代である、仁和元年（八八五）から、高山寺聖教類第四部（一一二函）十三『秘藏記末』の奥書に「延喜十年（九一〇）と記されていることより、八八五〜九一〇年頃の成立と考えたい。⁽¹⁹⁾

このように『秘藏記』の成立年代には諸説みられ決着をみるに至っていないが、最近の研究では「九〇〇年前後」を中心とした議論になってきている。但し『秘藏記』を空海の撰述とする見解は今日行われていない。

五 『秘蔵記鈔』に説かれる草木成仏説について

最初に『秘蔵記』所説の草木成仏について触れておく。

草木非情成仏の義。法身は微細の身にして五大所成なり。虚空も亦五大所成なり。草木も亦五大所成なり。法身の微細の身は。虚空乃至草木まで。一切処に遍せざることなし。是の虚空是の草木即法身なり。肉眼に於いては麁色の草木を見ると雖も。佛眼に於いては微細の色なり。是の故に本体を動ぜずして佛と稱するに妨碍なし⁽²⁰⁾

ここには法身は微細な身であり五大所成であることがいわれ、同様に虚空も草木も五大所成であるとされる。その法身は虚空・草木に遍在する。肉眼においては麁色の草木を見るが、佛眼においては微細の色に映るとある。『秘蔵記』の記述の問題がないわけではない。法身・虚空そして草木を五大所成とすることである。『秘蔵記』が空海の六縁起思想を反映するものであるならば、『即身成仏義』に説かれるように六大所成（生）とするべきであろう。

さて『秘蔵記』の注釈書である『蔵中冶金抄』と『秘蔵記鈔』についてであるが、『秘蔵記鈔』の奥書には、両著が『秘蔵記』の要書とされていたという消息が残されている。

右の此の抄（鈔カ）並びに冶金抄は秘蔵記の要書にして重宝の書なりと雖も写本謬り多くして書写に勞せり。全部書（し）功（の）成就の後、日々之れを拜見すと雖も文を誦するに至って字体知り難し。寔とに之れを嘆くに已後の君校合を加うべし⁽²¹⁾

『蔵中冶金抄』を説いた成賢と『秘蔵記鈔』を論じた静遍は、勝賢を同じく師とし、互いに受法した法を伝授しあっている。このような両者によって著された『秘蔵記』に関する扱いを比較しておくことにする。

まず『藏中冶金抄』に示されている成賢の理解を確認する。

細色麁色とは前(前)に言う所は心内本有と心外随縁となり。前には正法(報カ)に就いて本有成仏を云う。今は依報に就いて本有を述ぶるなり。三昧耶身の故に成仏と云う。⁽²²⁾

微細色(佛眼)と麁色(肉眼)とは心内(本有)と心外(随縁)の有り様である。前に正報の本有成仏を述べたが、「草木非情成仏」では依報の本有成仏を説明する。依報は如来の三昧耶身であるから(成)仏と称する、と単に言葉の解釈に留まっている。続いて取り上げる『秘蔵記鈔』のように草木成仏それ自体を問題視している様子はみられない。

『秘蔵記鈔』は草木成仏について、円珍の『円多羅義集』⁽²³⁾と安然の『菩提心義抄』⁽²⁴⁾を視野に入れて論じている。まず安然の『菩提心義抄』についての考察がなされている。論点は三点ある。A草木は発心修行成仏するのか、B草木等は心識を具有するのか、C木や金等によって佛形(像)や五鈷等が造られる。草木に心識を認めるならば、佛像の製作工程において草木を伐ることになるが、この行為は罪(殺戒中の伐草木戒)を犯すことにならないのか、というものである。

最初にAについて検討する。安然は『菩提心義抄』において、依報である器世間が衆生の善業力・諸仏本願力・真如淨薫力の三力によって佛土となり佛身と成るといふ。これを自依心の成仏・他依心の成仏・共依心の成仏・唯一佛性発心成仏(非自他共依心成仏)の四義によって説明するが、『秘蔵記鈔』は『菩提心義抄』の草木成仏説の全般に亘って引用している。

一には自依心成仏。器世界も真如の変作であり、一切有情が真如を成仏の因とするように、器世界も真如を成仏の

因として発心成仏する。二には他依心成仏。正報である有情が成仏する時に依報である国土も成仏する。安然是『金剛鐔』、『中陰経』、『大宝積経』により論証をする。その中『金剛鐔論』には「一佛成道すれば法界此の佛の依正に非ざるはなし⁽²⁵⁾」とあり、つまり一人が成仏することにより有情非情のすべてが成仏することが明かされる。三には共依心成仏。自依心と他依心によって成仏することである。即ち草木の中にある浄心薰習力（自依心）と諸佛力（他依心）によって成仏することができる。四には唯一佛性発心成仏。草木等が自依心・他依心・共依心により成仏するが、これは自の佛性でも他の佛性でも共の佛性によるのではない。従って自の発心・他の発心・共の発心でもなく、唯一の佛性が発心して成仏するとしている⁽²⁶⁾。

更に安然是続ける。法相宗・三論宗・華嚴宗・天台宗においては草木が発心し成仏することを説かない。

まず法相宗である。摄相帰性門の意によると、方法は真如であり衆生は皆佛である。しかしながら、性相別論門では方法即真如ではないので、成仏するもの（有情）と成仏しないもの（非情）が存在することになる。

三論宗では、理の内の意（真如の平等性）からいうなれば、衆生が発心し成仏すれば草木も発心成仏することになる。理の外の立場では衆生は発心し成仏し、草木は発心成仏しないことになる。

華嚴宗では、一切の諸仏は等正覚を成ずる時に、一切の衆生等の身と国土等の身を得るといふ。衆生世間と国土世間も佛身と同一であり、智正覚世間が等正覚を成ずる時に衆生世間・国土世間も同時に円融し成仏すると説く。しかしながら、国土（世間）身そのものが発心し成仏するとは説かれていない。

天台宗では、草木等に佛性・心性・中道・三身を認めるが、草木の発心修行成仏に直接触れる証文はない。

その上で安然是五時教判論によって、真言宗（安然のいう）では草木等の自発心修行成仏が可能であると主張した⁽²⁷⁾。

その思想的根拠とするのが、『大日経』『大毘盧遮那成仏神変加持経義釈』（義釈と略す）『大毘盧遮那経供養次第法疏』（供養法疏と略す）である。

『大日経』の「阿闍梨真実智品」には左記のようにある。

我れ即ち心位に同なり 一切処に自在にして 普く種種の 有情と及び非情に遍ぜり 阿字は第一命なり 縛字を名づけて水とす 羅字を名づけて火と為し 卍字を忿怒と名づく 佉字は虚空に同じ 所謂極空の點なり⁽²⁸⁾

『大日経』の文について『義釈』は次のように解釈する。

阿字第一命とは謂わく即ち阿字を以って心と為す、故に一切に遍じて自在に成す。言わく此の阿字は我れに異ならず、我れは阿字に異ならず。乃ち悉く一切の情非情の法に遍ず、此の諸法は即ち阿字を以って第一命とするなり。猶お人の出入の息有るは、此れを以って命とす、息絶えぬれば即ち命続かざるが如し。此の阿も亦然り、一切の有情、以って命とす。⁽²⁹⁾

空海が『大日経』『阿闍梨真実智品』を依り所として、六大思想を体系づけたことは前に確認した。

安然是『大日経』と『義釈』により草木の発心成仏思想を建立する。つまり『義釈』の「諸法即以阿字為第一命」の第一命とは発菩提心のことである。これは草木が自依心によって発心する義である。「我不異阿字也。乃悉遍於一切情非情法」の一文は、行者の菩提心が（有）情非情に遍じていることを表す。これは草木が他依心によって発心する義である。「我即同心位一切処自在而成」の文は、能所和合の共依心による発心を意味する。空海は『即身成仏義』の中で「我即同心位」を識大とし、一切処以下を識大を含めた六大の自在なる用と位置付けた。ともあれ安然是同じ『大日経』の文に自依心成仏・他依心成仏・共依心成仏を認めた上で、これらの三義はいずれも阿字を第一命とする

もので、阿字の理法は自ら菩提心を発すのであり、行者や諸法が発すのではない。唯一佛性による発心であるとい⁽³⁰⁾う。また阿字を発菩提心と規定した上で、『供養法疏』の教説を用いて、四重秘積による阿字の理解を示す。『供養法疏』は阿字について、秘密積・秘密中秘積・秘中秘積の三種を明かす。

問う、阿誰か本法に向いて本不生を呼び造すや。

答う。三種あり。一には秘密積、二には秘密中秘積、三には秘中秘積なり。一に秘密積とは、大毘盧遮那、本不生を説きたまうが故に。二に秘密中秘積とは、阿字自ら本不生を説くが故に。三に秘中秘積とは、本不生の理に自ら理智ありて、自ら本不生を覚るが故⁽³¹⁾に。

四重秘積とは、これに浅略積（一般的解積）を加えた理解である。『供養法疏』の阿字解釈をうけて、安然は以下のように述べる。

四秘中深秘積。悉曇に云わく。此の阿字は佛天人修羅の所作に非ず。本より是れ自然道理の所作なり。故に是れ真如隨縁變現の形声なり。若し有情は真如隨縁を以つての故に発心成仏す。亦阿字（も）真如隨縁を以つての故に発心成仏す。既に真如變作の阿字と言う。故に知んぬ。有情非情皆阿字を具す。同一真如の變作する所なるが故⁽³²⁾に。

四秘中深秘積とは『供養法疏』にいう三秘中秘積に相当する。則ち（阿字）本不生の理には本来理智が備わっており、自ら本不生を覚ることが明かされている。この阿字は佛・天・人・修羅の作すものではなく、本より自然の道理によるものである。有情が真如隨縁の理によって発心成仏するように、阿字も真如隨縁により発心成仏する。有情も非情も共にこの阿字を具有する、と安然はいう。

もっとも坂本幸男博士は「草木成仏の日本的展開」の中で、安然の一連の主張について

前掲の大日経の文が草木の発心成仏の典拠であるということは、一般にはなかなか理解し難い所であるけれども、併し、当時の真言教学では斯くの如く理解していたのであろう。⁽³³⁾

といい、安然の解釈に少なからず疑問を示している。

安然の四義による解釈について、静遍は『秘蔵記鈔』において

問う。此の安和上の釈は自家の義と符合する哉

答う。天台の自依心の故に発心成仏する等の四義、唯だ真如随縁変作諸法故に、有情非情は同一真如なるが故に相即して成立する。故に草木有心の義、其の旨を成ずるなり。⁽³⁴⁾

と論じ、天台教学にいう自依心成仏等の四義は、諸法を真如の変作とする真如随縁による理論であり、有情も非情も同一なる真如による存在と捉えている。(真言教学との相異についての静遍の立場は後に詳述する)

次にBについてである。安然は『菩提心義抄』を通じて、草木の佛性(成仏)の問題から展開させ草木の発心修行成仏の論証を試みている。ここに一つの疑問が生じることになる。草木は発心修行するための心識を具有するか否かということである。安然は『菩提心義抄』において

問う。有情は九識を具するが故に第六意識は善悪を分別して菩提心を発す。今、色塵等は現に八識を闕す。已に意識無し。何を以って発心せん。

答う。有情の第九の淨心変じて八識と成る。八識能く七識を現するが故に。亦非情の第九の淨心変じて八識と成る。八識亦七識を現す。已に第六有り、何ぞ発心せざらんや。…(中略)…

問う。若し爾らば一一の有情に各九識有るが如く、亦一一の微塵に各九性有るや否や

答う。龍樹の十識の中に云わく。八識常の如し。第九識一切一心識。謂わく一切に各の一心有るなり。第十の一

心一心識。謂わく一切共に一心有り。云云 故に知んぬ、一一の有情一一の色塵共に一心有り。故に一心と云う。

謂わく情非情に各一心有り。⁽³⁵⁾

と明かす。即ち有情は九識を具す。この中の第六意識は善悪を分別する識であり、菩提心を発す識でもある。草木等の色塵には八識はなく、従って意識もない。如何にして発心にいたるのか？このような問いに対して安然は、有情も九識の淨心が變じて八識となり、八識からさらに七識を現するようになり、非情にも同様のことが成立する。一一の有情・一一の非情に一心（真如の淨心）を具有するのである。

静遍は安然の見解を踏まえて

此れ等の義の意は皆真如の性を具するが故に草木等に八識有るなり。事を具するには非ざるなり。自宗の義は大無礙常瑜伽の故に非情草木等に各六大有り。其の中の五大とは第九識なり。識大とは第八識なり。但し草木等は五大を表と為し識大を裏と為す。人天等は識大を表と為し五大を裏と為す。之れに依って現に人天草木等の別有り。然りと雖も六大皆事を具して性を具すに非ず。仍って各各に発心成仏するなり。

但し我等凡夫は見ることに能わず知ること能わざること、迷情の前には四曼隔別の故に草木三昧耶身の作業を見（え）ざるなり。若し達悟以後は互いに見互いに知るなり。四曼不離六大無礙の故に草木等皆各各に四曼有るがゆえに各各に発心成仏するなり。⁽³⁶⁾

という。安然は諸法の本性を真如とし、この立場から草木に八識を認めるのである。しかしながら、事（用）の具有

まで言明していない。真言教学は六大無礙常瑜伽による六大縁起を唱えるので、非情である草木等にも六大をみる。一切諸法は六大所成（生）である。五大は第九識であり、識大は第八識である。草木等（非情）は五大を表とし識大を裏とする。人天等（有情）は識大を表とし五大を裏とする。人天・草木の別は正しくこの理解による。六大は事（用）を有するのでそれぞれに発心成仏する。しかし、凡夫は迷情のために四種曼荼羅を隔別と解し、草木の三昧耶身の作業を見ることも知ることもできない。覚者は四曼荼羅各不離・六大無礙常瑜伽の意により発心成仏を了解するのである。

第三にCについての考証である。

問う。現に世間の人を見るに木金等を以って、或いは佛形を作し或いは五鈷等を作す。此の時に非情の三昧耶（耶カ）身（は）、他依心の故に実⁽³⁷⁾に羯磨身成仏の義を作す乎。又六大を切ることを具なうが故に表には不同なりと雖も皆情識を具せば草木を伐るに敬羅と成る耶

ここには二種の問いが起こされている。世間の人⁽³⁷⁾が木や金等によって、佛形（像）や五鈷（杵）等を作ることがあるが、①（如来の三昧耶身である）非情は、安然のいう他依心によって（羯磨身として）成仏することになるのだろうか、②また（木金等よって佛形を作る過程において非情の）六大を分断することを避けられないが、情識を具有する草木を伐るならば、その戒しめを破ることにならないのか、というものである。

①の問題について静遍は

答う。…（中略）…四曼不離の故に草木の羯磨形は巧匠人の縁に依って顕わるなり。

但し是れ彼の天台の他依心の義には同ぜざるなり。彼の有情開悟の時に、非情も佛体法性なることを覚らるが故

に成仏と云う。彼は一切皆成に、此れ成不成有るなり。

金木は縁を待つて羯磨身を顕得す。金木（の）発心の時、人（は）善心許り会して佛像を成ずるなり。云云⁽³⁸⁾

四種曼荼羅は不離の關係にあり、草木の羯磨形（羯磨曼荼羅）は巧匠の縁によって顕れるのである。しかし、これは天台宗でいわれる他依心成仏の意とは相異なる。天台教学にいう他依心成仏は有情の悟りに応じて非情も法性を覚知するのであり、そこには有情の成・不成の別による非情の成・不成が存在する。金木等は縁を待つて羯磨身を顕わす。金木が発心する時に人（巧匠）は善心によって佛像を現するのである。また②の伐草木（戒）罪については

次に草を伐り薪を断ち敬罪（羅カ）を成すべきことは天台の釈に云わく。伐草敬畜二罪同篇文 敬罪、之れ有るべし。但し三種世間依正繫属成立の義之れ有る故に 五大識大（増）表裏の故に世人の草木を伐ることに性罪は成ぜざるなり。

真言行者は四曼は皆佛体と覚るが故に唯佛与佛の因縁相成因縁隱顯互いに依正と為し互いに成壊と為すこと。皆是れ法爾の故に罪に非らず⁽³⁹⁾。

と表し、天台の釈にもあるように、草を伐り薪を断つことは罪になる。しかしながら、「三種世間依正繫属成立」と「五大識大（増）表裏」の意からいふなれば、世の人（在家）が草木を伐ることは罪とはならない。真言行者においては四種曼荼羅をそのまま佛体とみるので、すべては唯佛與佛による因縁の相成・隱顯であり、互いに依報・正報となり成壊となることは、法爾自然の道理であるから罪とはならないとしている。

静遍は『秘藏記鈔』に、円珍の無情成仏説も紹介する。円珍は『理智一門集』⁽⁴⁰⁾・『授決集』⁽⁴¹⁾・『円多羅義集』⁽⁴²⁾等で、草木成仏について論及している。円珍の無情成仏に關しては前の坂本論文に詳しい。

授決集下巻の無情成仏決によれば、真如の理に入つて一切法を観ずれば、真如実相の妙理でないものは無く、内外の色心と及び中間とはその体一相、即ち、無相であるから、有情と非情とは一体である。…(中略)…草木に佛性のあることは認めているが、草木の発心成仏修行には関説していない。…(中略)…理智一門集には、草木成仏を説いている。即ち天台大円教に於いては一色一香無非中道であるから、有情非情俱に大日如来の一身より生じたものであり、成仏とは大日の一身に叶うことである。…(中略)…円珍は一行より伝えた所として、金剛界の五字の成仏は草木成仏であると説き、…また草木にも心有ることを説き、その経証として、前掲の不空智吉蔵經の「非情草木の於て心無きもの無し」を援用し、…有情は胎藏界の阿字より出生し、草木は金剛界の鑿字より出生するが故に差別は可能である…⁽⁴³⁾

ところで『秘蔵記鈔』には、円珍が『円多羅義集』で説示した「草木成仏」に検討が加えられている。

問う。智証釈に云わく。林和尚の決に云わく。草木成仏は金剛界鑿字従り大悲と大智との二旨在り。大悲門の故に草木成仏の義を説かず。大智門の故に草木成仏の義を説く。⁽⁴⁴⁾ 文 此の義其の意如何
つまり草木成仏が大悲門では説かれず、大智門で説かれることに關する質疑が起こされている。

答う。此の義優美なり。本自ら迷悟は識大の前に之れを論ず。識大(が)五大に乖いて一念(の)分別心の起こすこと有り。是れ迷は始めの元初の一念にして衆生は此れ自ら起ここれり。此の識大の分別(が)五大に歸して列なるなり。是れ悟の初めなり。等覺の終心なり。仍つて成仏す。大智(の)識大は之れを謂う、大悲(の)五大の前には迷悟なきが故に成仏と云うべからず。

今、草木成仏とは草木の中に六大有り。彼の識大の前に成仏の迷悟有り。五大の前には成仏の義なし。有情の六

大も亦復是くの如し。但し六大四曼皆佛体の（という）前には五大も本来佛の義の故に本（より）成仏と云なり。⁽⁴⁵⁾

静遍はいう。迷・悟は識大において論じられる。識大が五大に反して分別の一念を起こすことが迷いである。この迷いである分別を起こすのを衆生という。識大においてのみ成不成の別があり、五大においては迷悟はない。六大所成（生）である草木の成仏も、識大において成不成が論議される、と。

最後に『秘蔵記』中の「是故不動本称佛無妨碍」は、草木の成仏を立証する一文とみなしている。

問う。今の文に云わく。是の故に本体を動ぜずして佛と称するに妨碍なし文とは草木成仏の義歟⁽⁴⁶⁾

答う。爾かなり。有情成仏とは、十界互具の故に十界（に）各佛界を具するが故に十界（は）皆本来佛なり。但し此の前には九界は佛に非らず、互具の故に佛と云うなり。非情成仏とは、四曼本来佛身の故に草木等即ち是れ佛の三昧耶身なり。故に本体を動ぜずして佛と称すと云うなり。此の四曼（の）本来佛身の前に九界且つ佛身なり。地獄鬼畜等（も）本来羯磨身の故に、十界中の佛と四曼の佛と総別不同なり⁽⁴⁷⁾

有情成仏とは十界互具の視点からいうもので、十界の各に佛界を具すことをいう。九界においていうものではない。非情成仏はあらゆる一切のものが四種曼荼羅にして本来佛身であるという視点から唱えられるもので、草木等も佛の三昧耶身とみなされるのである。四種曼荼羅においては九界も佛身である。地獄・鬼畜等も（本来）羯磨身とみるのである。即ち『吽字義』にも「三種世間は皆是れ佛体なり 四種曼荼は即ち是れ真佛なり」⁽⁴⁸⁾と明かすように、空海はすべての草木等を如来の三昧耶身とし、本体を動ぜずして佛とみたのである。

六 ま と め

真言密教における草木成仏について、『秘蔵記』と『秘蔵記鈔』を中心に眺めてみた。この考証を通して次のような結論を導きだすことになった。

草木成仏は湛然が『金剛鉤論』を著して以来、主に天台教学の中で取り沙汰されてきた。その影響を蒙ることになった日本天台においては、さらなる思想的進展をみせることになる。円珍は『理智一門集』『円多羅義集』で『不空智吉蔵経』を典拠として草木成仏を論じた。安然是『菩提心義抄』において草木の発心成仏を提唱した。安然によって草木の佛性をめぐる問題から草木の発心修行論へと展開することになる。安然是その思想的根拠を『大日経』『阿闍梨真實智品』の一説と『義釈』の解釈に求め、議論の対象となる草木と心識の関係については、(真如)性具説によってその解決を図ろうとした。

真言密教においても「草木成仏」が避けることのできない問題であった。その証左として『秘蔵記』をめぐる議論が存在する。承知のように空海は、安然が草木発心成仏の典拠とした『大日経』の教説によって六大縁起思想を確立している。そして六大思想の視点から、非情を如来の三昧耶身とし、非情の佛性(成仏)を容認する立場をとった。『秘蔵記鈔』において静遍は、円珍や安然の提唱した教説との比較をとおして、真言密教の草木成仏を論じている。静遍の示した草木成仏説は空海の六大思想を継承するものであった。

真言密教の根幹に関わる教説が網羅されるとみなされる『秘蔵記』に問題がないわけではない。この度の報告では触れなかったが、『秘蔵記』所説の「草木非情成仏」には法身・虚空・草木を五大所成とする。『即身成仏義』で

六大所成（生）説を唱えた空海の見解と相異なることはいうまでもない。

註

- (1) 宮本正尊「草木国土悉皆成仏の佛性論的意義とその作者」（『印度学佛教学研究』〈印佛研と略す〉九二・六九六―六九八頁）
- (2) 坂本幸男「草木成仏の日本的展開」（『中野教授古稀記念論文集』三〇八頁）
- (3) 亀井宗忠「真言宗における草木成仏論と即身成仏の人証とについて」（『仏教における証の問題』日本仏教学会編・一八四―一八五頁）
- (4) 『即身成仏義』（『十卷章』二二頁）
- (5) 『吽字義』（『十卷章』六四頁）
- (6) 『吽字義』（『十卷章』六五頁）
- (7) 『吽字義』（『十卷章』六八―六九頁）
- (8) 『秘密曼荼羅教付法伝』（『弘法大師全集』〈弘全と略す〉一・三頁）
- (9) 『遍照発揮性霊集』（『弘全』三・四七三頁）
- (10) 『大日経』（『大正蔵』十八・三八頁 a b）
- (11) 『即身成仏義』（『十卷章』十八―十九頁）
- (12) 『菩提心義抄』（『大正蔵』七五・四八五 c―四八六）
- (13) 『藏中冶金抄』（『統真言宗全書』〈統真と略す〉十五・三頁 a）
- (14) 大村西崖（『密教発達志』七九五―七九六頁）
- (15) 加藤精神「秘蔵記の著者に就て」（『密教』第一卷第三号）
- (16) 向井隆健「秘蔵記」成立考」（『密教学研究』十五）
- (17) 甲田有吽「秘蔵記」〈解説〉」（『定本弘法大師全集』五）

- (18) 米田弘仁『秘藏記』の成立年代(『密教文化』一八六)
- (19) 大沢聖寛『秘藏記の成立年代再考』(『印佛研』四七・二)・大沢氏は『秘藏記』について、ほかに「秘藏記の一考察」(『大正大学大学院研究論』集創刊号)・「弘法大師の教学と秘藏記」(『印佛研』三六・一)・「秘藏記」の撰述年代について(『密教学研究』二四)・「円城寺八巻次第」の引用文献について(『印佛研』四八・二)等の報告をしている。
- (20) 『秘藏記』(『弘全』二・三七頁)
- (21) 『秘藏記鈔』(『統真』十五・五七頁)
- (22) 『藏中冶金抄』(『統真』十五・二二頁)
- (23) 『円多羅義集』(『智証大師全集』下)
- (24) 『菩提心義抄』(『大正藏』七五)
- (25) 『金剛鑄』(『大正藏』四六・七八四c)
- (26) 『菩提心義抄』(『大正藏』七五・四八四c-四八五a)・『秘藏記鈔』(『統真』十五・五二頁)
- (27) 『菩提心義抄』(『大正藏』七五・四八五)・『秘藏記鈔』(『統真』十五・五二-五三頁)
- (28) 『大日経』(『大正藏』十八・三八bc)
- (29) 『義釈』(『修密要典大日経』下・四五七左a)
- (30) 『菩提心義抄』(『大正藏』七五・四八五c-四八六a)
- (31) 『供養法疏』(『大正藏』三九・八〇七c)・『秘藏記鈔』(『統真』十五・五四a)
- (32) 『菩提心義抄』(『大正藏』七五・四八六c)・『秘藏記鈔』(『統真』十五・五四a)
- (33) 坂本幸男『草木成仏の日本的展開』(『中野教授古稀記念論文集』三一六頁)
- (34) 『秘藏記鈔』(『統真』十五・五四頁)
- (35) 『菩提心義抄』(『大正藏』七五・四八七c-四八八a)・『秘藏記鈔』(『統真』十五・五四b-五五a)
- (36) 『秘藏記鈔』(『統真』十五・五五a)
- (37) 『秘藏記鈔』(『統真』十五・五五a)
- (38) 『秘藏記鈔』(『統真』十五・五五ab)

禅林寺静遍の草木非情成仏説について(中村本然)

- (39) 『秘藏記鈔』（『統真』十五・五五b）
- (40) 『理智一門集』（『智証大師全集』下・一一九七a―一一九八a）
- (41) 『授決集』（『智証大師全集』上・三八七b―三八八b）
- (42) 『円多羅義集』（『智証大師全集』下・一一八九b）・『秘藏記鈔』（『統真』十五・五五b）
- (43) 坂本幸男「草木成仏の日本的展開」（『中野教授古稀記念論文集』三一―三二二頁）
- (44) 『円多羅義集』（『智証大師全集』下・一一八九b―一九〇a）
- (45) 『秘藏記鈔』（『統真』十五・五五b―五六a）
- (46) 『秘藏記』（『弘全』二・三七頁）
- (47) 『秘藏記鈔』（『統真』十五・五六a）
- (48) 『卍字義』（『十卷章』六五頁）